

大相撲のビデオ判定前史－1950年代のテレビ中継

柏 原 全 孝

The History of Video Replay in Grand Sumo Tournament: the TV Broadcast in 1950s

KASHIHARA Masataka

Abstract: This paper examines the history of video replay (instant replay) in Grand Sumo. In the 21st century, the use of video replay as an aid to judgment has been widespread in many sports. Grand Sumo adopted the decision to use camera technology as early as 1969, and already has half-a-century of video-judging experience. However, while the public welcomed the adoption of video assessment, many pointed to the slow pace of adoption. For us, knowing that FIFA rejected any judging technology even in 2010, it is unbelievable that there is criticism for its late adoption. People tend to forget the long history of the adoption of video judgment in Grand Sumo, and continue to believe that it was delayed. When did the history of video replay begin? It was during the first tournament in January 1956. As Grand Sumo was very popular at that time, all the TV stations broadcast the tournament and were competing for ratings. NHK, the only public broadcaster, started showing an early replay ("Komadori" Broadcasting), allowing viewers to repeatedly watch the final scene. By doing so, they could understand whether or not a gyoji, or a sumo referee, judged the game correctly. Since then, viewers have demanded an accurate judgment by camera's eye.

Key Words: Sumo, video replay, TV broadcast, photograph

要旨：21世紀になり、多くの競技がビデオ映像を判定に利用するようになっている。2010年まではテクノロジーの判定への利用に消極的だったサッカーでさえ方針を転換しているほどである。多くの競技は21世紀以降、早い競技でも20世紀末からの利用だが、意外なことに大相撲は1969年にすでにビデオ判定の利用を開始している。ところが、さらに意外なことに、採用決定時に大相撲は「遅すぎる」との批判を受けていた。なぜこのような批判が起きたのか。その答えは1950年代から始まったテレビ中継にある。スロー再生こそ技術的に難しかったが、そのかわりに写真技術を利用した擬似的なリプレイ「こまどり放送」(1956)が行われていた。これが勝負の決定的な場面を視聴者に提供したことにより、判定への疑問が深まることになった。

キーワード：大相撲、ビデオ判定、テレビ中継、写真

は じ め に

本稿は大相撲が長らく採用しているビデオ判定について、その採用前の時期について研究するものである。大相撲のビデオ判定は1969年という早い時期に採用されたのだが、当時の新聞はその「早さ」を称えるのではなく、「遅さ」を批判していた。21世紀のスポーツ界を知る立場からみれば、異例の早さとしか思えないが、いったい何が「早さ」を「遅さ」に変えてしまったのだろうか。本稿は、いまでは忘れられしまったビデオ判定前の

歴史を掘り起こし、それによって大相撲そのものの歴史に新たな視点を加えることを意図したものである。

1. 各競技の判定テクノロジーの採用状況と大相撲

21世紀のスポーツでは、さまざまな競技に判定を補助するテクノロジーが採用されており、エリートレベルの試合などでは観戦中にテクノロジーが力を発揮する場面に遭遇することも珍しくなくなっている。じつは、スポーツにおける判定補助テクノロジーの導入の歴史を見ると意外と古い。フェンシングの電気審判機は1920年代にまで遡るし、1930年代には陸上競技の着順判定で写真が利用されている。フェンシングの場合はスイッチのオンオフによる電氣的なものであるし、陸上競技の場合はゴール地点にカメラを固定し、着順だけを見ればいいので、相対的にシンプルだったことも採用の早さに影響したと思われる。

その一方で、人気スポーツのなかには導入を渋る競技もあった。たとえば、2000年代までのサッカーがそうだった。サッカーのルールに関する取り決めをする国際サッカー評議会(IFAB)は2010年になってもなお、レフリーの判定にテクノロジーを利用しないという決議をしていた。そのころは「サッカーの判定は人間がするもの」という見解がまだ強かったのである¹⁾。しかし、同年に行われたワールドカップでの誤審問題のためにその決定は7ヶ月後にあっさり覆された。そこから一転してサッカーも導入に前向きになり、2014年のワールドカップでゴールラインテクノロジー(GLT)を、2018年のワールドカップでビデオアシスタントレフリー(VAR)を採用するに至った。ワールドカップ以外の国際大会やヨーロッパの各国リーグでもこれらはすでにひろく採用されている。

日本のプロ野球(NPB)も2010年代になってビデオ判定を取り入れたが、ビデオ判定用に用意されたのは驚くべきことに家庭用ビデオデッキと16インチのブラウン管テレビだった(横浜スタジアム)。これはすぐに改善されることになったが、サッカーにしろNPBにしろ、テクノロジーを判定に導入するときには抵抗も生じうることを示す例であろう。

アメリカの三大スポーツでは、アメリカンフットボール(NFL)が1986年に導入したのがもっとも早い。1991年までで中断し、その後1999年から再導入している。バスケットボール(NBA)は2002-2003年シーズンからの導入で、2018年サッカーワールドカップのVARで見られたようなセントラル方式は2014-2015年シーズンからである。野球(MLB)は2つにやや遅れる形で2008年から導入されている。

起源を同じくするサッカーが導入を渋っていたのとは対照的に、ラグビー(ユニオン)はサッカーに先駆けて2001年からテレビジョンマッチオフィシャル(TMO)の利用を認めている。ただし、2019年現在もなお世界的試験実施ルールという位置づけで正規のルールにはなっていない。

フェンシングをのぞいて上に述べたのはチーム対戦型の球技ばかりであるが、個人対戦型の球技としてはテニスのライン判定システム(ホークアイ)がよく知られている。2006年からプロテニスツアーに導入されたが、テニスと同じようにネットを挟んで対戦するタイプのバドミントンやバレーボールといった競技にも2010年代になって同様のライン判定システムが採用されている。

個人競技でも球技以外では柔道もビデオ判定を2007年から採用した。が、 Jury と審判の権限が曖昧になるなど混乱も見られ、とくに2012年オリンピックロンドン大会では問題が大きくなったことが知られている(柏原2015)。

以上のように、抵抗があったり、運用で混乱が生じるなどしながらも、テクノロジーを判定に利用することはスポーツ界の大きな趨勢となっている。極端に早いフェンシングをのぞけば、対戦型の競技で判定にテクノロジーを利用するのは20世紀末から21世紀にかけてである²⁾。そのようななかで、意外にも「伝統を重んじる」大相撲がビデオ判定を導入したのは、日本生まれのオリンピック競技である柔道がビデオ判定を導入するおよそ40年近く前の1969年であった³⁾。人気プロスポーツとして比較してみても、ビデオ判定としては世界的にも相当に早い時期の導入だったといえるだろう。だが、1969年に日本相撲協会が導入を決定したときの反応は、導入そのものを歓迎はするものの、厳しいトーンで覆われたものだった。たとえば、導入決定を伝える記事の冒頭の一文は次のようなものであった。「“古式豊かな伝統”という名のもとに“科学の目”を拒否してきた相撲協会が「写真を勝負判定の参考にする」と英断をくだした」(毎日1969.3.18)。別の新聞では見出しに「世論に屈した協会 15

年前から拒否し続けた「写真」（読売 1969.3.18）と、遅れを指摘している。判定にテクノロジーを取り入れるべきだという声があるのに、相撲協会はなかなか導入決定の判断をしなかったが、ここに至ってそれがようやく導入に至った、そういう背景をこれらは示唆している。実際、毎日の先の一文から始まる記事など「結論的にいえば非常にけっこうなことだしむしろおそ過ぎた感じがしなくもない」（毎日 1969.3.18）と遅さを指摘している。その後の他の競技の導入状況を知るわれわれからすると、遅すぎるどころか、著しく早いとしか思えないのだが、当時の論調はまったく違っていたのである。どうやら、導入決定以前の大相撲の勝負判定に対する論調には21世紀のわれわれが忘れてしまったものがあるようなのだ。以下では、おもに全国紙3紙の新聞記事を中心にビデオ判定導入以前の大相撲報道を分析していきたい。

2. 証拠としての写真

大相撲に写真判定をという声はいつ頃から現れたのだろうか。朝日、読売、毎日の3紙を遡って探してみると、1956年ごろから写真判定を求める声が新聞に掲載されるようになったことがわかる。そのうち確認できる範囲でもっとも早いのは、1956年の初場所11日目吉葉山－若ノ花の取組をきっかけとするものである。この一番は吉葉山の勝ちとなったのだが、行司の軍配が吉葉山にあがったとき、検査長も含めた5人の検査役（現在の審判委員）は誰も物言いをつけなかった。そのため軍配通りに勝敗が確定した。この取組について全国紙3紙の取り扱い方の違いを見ていこう。

もっとも詳しく報じたのは読売だった。「問題の一番」として勝負が決まる瞬間の写真を2枚掲載し、取組の内容から控室での声まで多くのスペースを割いて報じている。写真の2枚目は吉葉山のヒザ下が土俵についていることがはっきりとわかる写真で、その横に次のように書かれていた。「吉葉思わず右ヒザから崩れて上体のめりかかるのと同時に若左から吉葉の右の二の腕をぐいと押し付けたため右フクラハギから落ちた」（読売 1956.1.19）。吉葉山の負けを示す証拠写真とでもいうような扱いである。そして、「西の方からは明らかに若のしかけ勝のように見えたしすくなくも同体であり、当然物言いがつくべきであった」⁴（読売同）と無作為の検査役たちのために生じた誤審だとして検査役たちに批判の矛先が向けられた。

読売同様に詳しく報じたのは朝日だった。こちらは読売より多い写真4枚を使って、見出しは「吉葉山、若ノ花の熱戦」である。見出しのニュアンスが読売とは少し違っている。勝負判定に疑義を唱える見出しの読売に対し、朝日は相撲内容に力点を置いている。記事の方も読売ほどははっきりと吉葉山の負けを主張するような表現を用いていない。「軍配吉葉に上ったが若の倒れるより先に吉葉の体が落ちたように見える」（1956年1月19日朝日、傍点引用者）と読売に比べて婉曲的である。朝日は4枚も写真を掲載しているわりに誤審とは断言しない。じつは、朝日の掲載写真は読売の写真と違い、肝心の場面で吉葉山の右足が若ノ花の足に隠れてははっきり見えないのである。読売の写真と朝日の写真とは角度が少し違うだけなのだが、朝日の写真では大事なところが隠れしまった。そのぶんだけ誤審の可能性を示唆するにとどまらざるをえなかったのである。

毎日もこの取組を取り上げているが扱いは他の2紙より小さい。写真を1枚掲載しながらも、取組中の場面であり、最後の決定的な場面ではなかった。相撲記事全体の見出しも「栃と若また黒星」というその日の取組全体に対する大まかな表現である。また、詳報されるいくつかの取組のうちの一つには入っているが、そこでも「吉葉危い星を拾う」とあるのみで誤審の可能性には一切触れられていない。

以上3紙の差は、明らかに掲載写真の違いに由来する。証拠写真となるような決定的な場面を掲載した読売がもっとも威勢のいい記事を書き、微妙な写真の朝日は大きく扱いつつも表現を選び、それらしい写真のない毎日は小さい扱いになっている。3紙の扱いの違いに、大相撲の勝敗を伝える上で写真が持つ威力がはっきり表れている。新聞は写真判定の有効性を自らの掲載写真を通じて示したわけである。そして、決定的な証拠写真を掲載できた読売の勢いはこれだけでは収まらない。

同日の「砂かぶり」というコーナーで「憤慨する若ノ花」という見出しを付けてこの取組が取り上げられる。自分の勝ちだったと述べる若ノ花に加え、自分も若ノ花の勝ちだった思うという朝汐のコメント⁵とともに、「とにかくこのように写真と判定があきらかに食い違った最近の例として○照国－東富士（22年秋）○照国－若ノ花（25年秋）○照国－若葉山（27年春）○千代の山－北ノ洋（30年初）などがあるが、陸上競技や競馬が写真

判定を採用しているのに相撲界だけが、肉眼による判定を絶対としているのはどういうわけだろうか」(読売 1956.1.19)としている。写真判定を使わないのは「相撲界だけ」ではないことぐらい人気プロ野球チームの親会社の記者が知らないわけではない。この書き方は明らかな誇張なのだが、この誇張ぶりに読売の威勢の良さがよく表れている。

読売が「写真と判定があきらかに食いちがった」というのであれば、記事で例示された取組をどのように報道していたのか、実際に見てみよう。5つのうち今回の事例にもっとも近く、ちょうどこの記事の1年前にあった1955年初場所の千代の山-北ノ洋を3紙がどのように伝えていたのかを比較してみる⁶。じつは、この取組の写真に掲載した毎日だけであった。読売は偉そうに書いていたが、この時写真は掲載できていないのである。毎日が掲載した写真を見ると、「ものいいの一戦」として「赤房下に猛烈に寄り立てた北ノ洋を千代が小手投げで決めた一瞬、しかし千代の左足は土俵を割っている」とのキャプションが添えられ、誤審の可能性がはっきり指摘されている(毎日 1955.1.13)。この取組で行司は千代の山の左足の踏み越しを見て軍配を北ノ洋に上げるが、物言いがついて千代の山の勝ちになったのである。

写真を載せなかった読売の記事はどうだったかと言えば、誤審の可能性にも全く触れていないのである。「行司伊之助千代にふみ越しがあったとみたのか、ウチワを北ノ洋にあげたため、東西両検査役からもものいいつき協議の結果千代の山の勝に決した」(読売 1955.1.13)。肝心の「ふみ越し」があったかどうかを読売ははっきり書かず、曖昧に書くだけである。しかも、この書き方では間違えたのが行司になってしまうが、実際には毎日が書いていたように、千代の山の足は先に土俵外に出ていたのでそれを見ていた行司の判定は正しく、誤審したのは検査役である。1年後の読売の記事の意味するところも検査役の誤審であるはずなのだが、この記事ではまったくそのように書かれていない。朝日も読売と同様に、誤審の可能性にはまったく触れない書き方で、「千代は勝ったものの二の腕まで深く差した北に小手投を打つとはあまりに強引すぎた」(朝日 1955.1.13)と千代の山の技術的な未熟さを分析する取り口解説の記事にとどまっていた。

結局のところ、読売は威勢のいいことを書いてはいたが、1年前の千代の山-北ノ洋での誤審の可能性に触れたのは写真を掲載した毎日だけであり、それは翌年の吉葉山-若ノ花での各紙の姿勢と同じで、写真を掲載できた社はそれによって誤審の可能性を指摘する。しかし、1955年の毎日には1956年の読売のような威勢の良さはない。千代の山-北ノ洋があった当日の取組で毎日がもっとも注目して「焦点の一番」のコーナーに取り上げたのは別の取組、栃錦-若瀬川だった。誤審の問題は証拠写真をもって指摘するにとどまり、1年後の読売のように写真判定の必要性を主張し、相撲の勝負判定制度を云々することはなかったのである。

1955年の千代の山-北ノ洋と1956年の吉葉山-若ノ花、いずれも1月の初場所でちょうど1年しか違わない。同じような誤審だっただけに、これらの対照が際立つ。写真が論調を決める点に変わりはないが、1956年の読売はそこから写真判定の必要性を主張したが、1955年の毎日はそれをしなかった。さらに日を追うとその対照がいっそうははっきりする。読売は数日後の夕刊コラム「よみうり寸評」でも写真判定に言及。「近代相撲が、動きの点で、ますます早く微妙になっていることを考えると、写真判定なども、困難はあろうが、真面目に研究すべきものだ」(読売夕刊 1956.1.22)。さらに場所後にも、相撲評論家彦山光三と読売の担当記者数名による場所を振り返る座談会記事で吉葉山-若ノ花をまっさきに取り上げる⁷。

-(略) 若ノ花といえはすぐ吉葉山との一戦を思い出す。ここから一つ話を始めよう。

C うちはあの一戦をもっとも詳しく書いたんだが、ファンから投書は来る、電話はかかる。しかしどの新聞の写真もあれば絶対若ノ花の勝ちだったね。

(略)

-協会としてはいくら新聞の写真がどううつっていいようと断固として耳をかさぬかね。

B いままでの例によると、たとえば以前の千代の山と北ノ洋、若葉山と照国、若ノ花と照国、それから照国と東富士-みなそのとき決定したとおり動かさないんだね。あとにどんな証拠が出てても動かない。(略)

(略)

-その判定をだれがどうして決めるか。四すみに写真機を備えて撮る以外にないと思うね。

E それでわからなかったら取り直し…。

(読売 1956.1.23)

この座談会は司会が読売の運動部長でそれ以外のアルファベットは彦山と記者たちだが誰がどの発言の主なのかはわからない。彦山以外は全員読売の人間である。写真が証拠とみなされていることや、Cの自慢げな発言に決定的な写真を掲載できたことが彼らの発言を後押ししているようだ。過去の例をすらすら並べるBが先に引用した「砂かぶり」を担当していたのかもしれない。そして、司会が写真判定を提案する。このように、1956年の読売は畳み掛けるように写真判定の必要性を強調するのである。

読売に座談会が掲載される2日前、毎日の投書欄に「相撲に写真判定を採用せよ」という見出しの投稿が掲載された（毎日1956.1.21）。詳報しなかった毎日の読者からの投稿であり、誤審の可能性に全く触れなかった毎日にもこうした投稿が寄せられたということは、この当時、写真判定がある程度人々の口に上っていたことが推測される。また、電話や投書が多かったことが座談会でも触れられており、大相撲での写真判定採用に対する関心はこの時期に急激に高まったことはおそらく間違いない。読者投稿に関しては読売も同年3月に「気流」欄に「非近代的な相撲協会」というタイトルで「検査役制度にも欠陥が多いが、写真判定の採用、行司にも発言権を認めることなどは当然のことで、それが相撲界の科学化、民主化である」（読売1956.3.6）という投稿を掲載しており、関心の高まりはここからも確認できるだろう。

1956年と1955年とではこれほど相撲の写真判定について対照的な反応が生じているのである。このことは1955年5月に毎日新聞に掲載された東京日日新聞（毎日新聞）の元主筆阿部真之介の「改革すべき相撲の諸制度」という論説からも間接的に確認することができる。そこでは客席の質や茶屋制度から相撲の審判制度、勝負判定について行司の権限、検査役の非中立的立場などに至るまで広く問題点が指摘されているが、判定の正確性や写真判定はまったく話題にならない（毎日1955.5.28）。横綱審議委員も務めた阿部の相撲に関する知識は深い。だから、行司と検査役の関係の問題、部屋持ち親方が検査役を兼ねることの問題、その部屋に行司が所属したりせざるをえないことによるアンフェアなど勝負判定制度に関する問題などを事細かに指摘している。にもかかわらず、判定の正確性の担保については何も取り上げないし、ましてや翌年ならきと言及されていたであろう写真判定の話題がまったく出てこないのである。つまり、新聞紙上を見る限り、大相撲の写真判定は完全に1956年以降の話題なのだ。すなわち、1956年の初場所11日目吉業山－若ノ花こそ本稿の課題とする写真判定前史の起点なのである⁸。

それにしても1955年と1956年のこの差は何によるものだろうか。その答えは、当時の新メディア、テレビにある。

3. テレビと写真判定

日本でテレビの本放送が始まったのは1953年である。1925年から始まったラジオ放送はすぐに受信契約数が25万を超え、翌年には36万に達していた。それに比べてテレビの受信契約の伸びは鈍く、1年後も5万だった。シャープ兄弟と力道山・木村政彦のプロレスが半ば神話的な記憶ないし常識として昭和史に刻まれるほどに盛り上がったのは、ちょうどその頃である（小林2011）。

受像機が高額だったせいもあってなかなかテレビの受信契約はのびなかった。それでも1956年にそれまでの東京、大阪、名古屋に加えて、仙台、広島、福岡、札幌でNHKのテレビ放送が始まり、受信契約数も40万を超えた。翌1957年には90万と急激な伸びをこの時期から見せ始める。とはいえ、世帯普及率が10%を超えたのは1958年のことであり、世帯内のいわゆる「茶の間」でテレビを見ることが一般化するのはいくらか先であった。当時のテレビの視聴は街頭テレビに代表されるように公共性の高い場所でおこなわれていたのである。また、放送エリアを超えてテレビを視聴することもおこなわれていた。たとえば、関東圏をエリアとする東京の電波がエリア外の長野などでも受信され、そこで街頭テレビのように視聴されることもあった（猪瀬1990）。だから、受信契約数や世帯普及率が示す数字以上に、テレビは公共的な空間のなかで多くの人々に視聴されていたのである。

NHKによる大相撲のテレビ中継は放送開始年の1953年夏場所（5月）から始まった。同年9月には民放の日本テレビも大相撲の中継を開始している。同じものを中継しているのだが、このような放送の形はしばらく広がり、1959年ごろには東京地区のその時点まで開局した民放すべてとNHKが大相撲を中継するようなことになっていた⁹。本場所開催中の夕方はテレビを付ければかならず相撲が放送されているという状況だったのである。

1956 年の東京エリア（関東）であれば、NHK と当時開局していた民放の日本テレビ、TBS テレビ（当時 KR テレビ）の 3 局が同時時間帯に大相撲中継を放送していた。街頭テレビのほか、お店などの人の集まる（人を集めた）場所などの公共的な場所に設置された私的なテレビや近所の家に入ったテレビはすべて相撲中継が流れていたのである。国技館に行かなければ見れなかった時代に比べ、人々が大相撲を見ることははるかに容易であった。そして、人々は大相撲の際どい勝負の際どさを視覚的に理解するようになったのである。

この当時はまだテレビで動画のリプレイを見ることはできなかった。そのかわり、ボラロイドカメラなどを使った変則的なリプレイを「駒どり放送」として放送していた（志村・福田・山脇・谷村・佐々木 1957）。NHK は 1956 年初場所 5 日目から、「勝負の瞬間」としてボラロイド写真による擬似的なリプレイを放送し、好評を得ていた（志村・福田・山脇・谷村・佐々木 1957: 444）。こうした工夫により、擬似的ではあっても、テレビは勝負の決まる決定的な場面（ないしはそれに近い場面）を繰り返し映すことができるようになっていたのである。

テレビが流す「駒どり放送」は視聴者の大相撲を見る目を変えた。それがかいま見えるのが 1956 年 9 月に読売の「気流」欄に掲載された「相撲にも写真判定採用せよ」というタイトルの読者投稿である。「先場所 NHK でボラロイドカメラに一工夫した連続写真で「ただいまの取組分析」として見せてくれた。あの方法を用いれば、五、六秒の勝負も二十五枚前後の連続写真となり、はっきり勝負の結果を知ることができる」（読売 1956 年 9 月 11 日）。視聴者は大相撲の勝負が決まる瞬間をそのものとして見る目を得たのである。言い換えれば、テレビの「駒どり放送」はかつての大相撲にあった勝敗判定のおおらかさ、引分や預かりという裁定があった頃の大相撲のおおらかさの残滓すら一掃することになった¹⁰。「駒どり放送」は大相撲はシビアに勝ち負けが決まるものであること、競技スポーツそのものであることを映し出したのである。

テレビ放送以前から人々は大相撲をスポーツとして、競技として受け取っていたことだろうが、受け取り方が決定的にその質において変わったのである¹¹。すなわち、「駒どり放送」は見えなかった勝負の瞬間をはっきり見せることで肉眼で判別できるレベルを超えてでも相撲の勝ち負けを決定すべきであり、それがスポーツとして正しいことなのだという認識を人々に与えたのである。

スポーツ哲学者のハリー・コリンズは誤審がテレビのリプレイから生まれたことを指摘している（Collins 2010）。コリンズによれば、かつて観衆や視聴者が審判の判定に疑問を持つことが難しかった。なぜなら、審判は最も近くまたは最も見やすい位置からプレイを見ることのできる優越的な視点に位置し、さらに普通の観客よりもはるかにルールに関する深い知識を持っていたからである。しかし、この状況はテレビのリプレイによって変化してしまった。リプレイは審判の見ることのできない場面を視聴者に提供する。それによって、視聴者の方が優越的な視点を獲得することになってしまった。そのため、審判の権威が揺らぎはじめる。そして、審判は正しく判定できていないのではないかという疑義が生じるようになる。

1956 年はまだ白黒テレビで、画面サイズも 17 インチや 14 インチが主流だった。そのぶん、けっして見やすいわけではないが、相撲は競技のエリアが土俵とその周辺に限られており、比較的近くから撮影できる。野球のように外野フェンスに向かって飛んでいくボールをカメラが追いかけていなければならないことに比べれば、土俵にどちらの体が先に落ちたか、土俵外に足が出ていたかどうかという場面はずっとはっきり見える。もともと人気の高かった相撲だが、力士たちが大きく映し出され、勝負がシンプルでわかりやすく伝わり、テレビ画面との相性が非常に良かった¹²。勝負が早く決着する競技であり、次々に取組が続いて見る者を飽きさせない興行としての歴史とスタイルを持っていたこともテレビに合っていた。すでに、ラジオの大相撲中継開始時（1927 年）に仕切りの時間制限を設けるなど、放送にのりやすいフォーマットに仕上がっていたことに加え、テレビ中継が始まる前年に視界を遮る柱を取り除くため土俵の屋根を吊り屋根に変更している（金指 2015: 225）。大相撲はもともとテレビに向いた素材だったわけだが、さらに積極的にテレビ向けのアレンジをほどこしていたのである。コンテンツ不足のテレビ黎明期に NHK と民放全局が同時生放送することになったのも大相撲中継ほどテレビに向いたコンテンツに対抗できるものを作ることが難しかったからである。これからほどなくして大相撲は栃若時代と呼ばれるスター横綱が牽引する盛期を迎えることになるが、テレビと大相撲の密な関係が果たした役割も大きかったと言えるだろう¹³。

テレビ中継が人気になるなかで、大相撲は普及率の数字以上に多くの人々に見られた。テレビはその人々に行司や検査役にはない優越的な視点を視聴者に提供していたのである。こうして 1956 年、NHK の駒どり放送のは

じまった初場所 11 日目の吉葉山－若ノ花が写真判定を求める起点となった。テレビは写真判定の実現可能性を画面を通じて実践的に視聴者に提供した。写真判定の実現欲求は大相撲中継が続く限り収まることはない。テレビは普及する一方であったし、どんどん工夫されたりプレイを見せ続けたからである。

(続)

参考文献

- Collins, Harry, 2010, "The philosophy of umpiring and the introduction of decision-aid technology", *Journal of the Philosophy of Sport*, 37(2), 135-146.
- 猪瀬直樹, 1990, 『欲望のメディア』, 小学館.
- 柏原全孝, 2015, 「判定者について：審判と判定テクノロジーをめぐる社会学的考察」, 追手門学院大学社会学部紀要, 第9号, pp.1-15.
- 金指基, 2015, 『相撲大辞典 第4版』, 現代書館.
- 小林正幸, 2011, 『力道山をめぐる体験』, 風塵社.
- Levinsky, Sergio, 2010, 「テクノロジー導入へ踏み出さざるをえない FIFA」
<https://sports.yahoo.co.jp/column/detail/201010260005-spnavi?p=1> (2019年10月7日アクセス)
- 西村秀樹, 2016, 「大相撲の文化性を問う：－祝祭からスポーツへ－」, スポーツ社会学研究, 24(2), pp.5-20.
- 新田一郎, 2010, 『相撲の歴史』, 講談社.
- 志村一郎・福田和夫・山脇久彦・谷村洋・佐々木巖, 1957, 「相撲の駒どり放送」, テレビジョン, 11(10), pp.444-487.

注

- 1 IFAB はイングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドの4協会と FIFA からなり、この5団体が1票ずつの議決権を持っている。2010年3月のときは北アイルランド、ウェールズ、FIFA がテクノロジー導入に反対した。当時 FIFA の事務局長だったジェローム・バルクは「テクノロジーがサッカーを侵すべきではない。サッカーは人間のものであり続けてほしいし、それがサッカーの美というものだ」と述べていた (Levinsky 2010)。
- 2 フェンシングが例外的なのはその導入の速さもさることながら、公式試合ですべて電気審判機の利用が義務付けられている点である。ジュニアレベルのローカルな大会でも使用が義務付けられており、フェンシングはテクノロジーなしに判定ができない。
- 3 導入当時までは写真判定と呼ばれていたもので、本稿では以下、写真判定という呼び方を用いることにする。
- 4 「行司は、勝負の判定にあたっては、いかなる場合においても、東西いずれかに軍配をあげねばならない」(勝負規則 行司 第四条)と定められているため、行司は自分が同体と判断してもいずれかに軍配をあげねばならず、同体という裁定は行司にはできない。同体という判断は審判委員(検査役)だけが可能なので、そのことをふまえて記事では「物言いがつくべき」という表現になっている。
- 5 朝汐はこの一番の控え力士であり、物言いの権利を持っているし、また、勝負判定に責任を持つことが相撲規則に定められているので、このようなコメントをするのは無責任と判断されても仕方がない面もある。ただし、一方で、かつては珍しくなかった控え力士からの物言いが戦中期以降、急激に抑制された点は考慮されねばならない(西村 2016)。読売も控え力士の朝汐のコメントを掲載しながら物言いをつけなかったことへの批判は検査役だけに向けている。
- 6 これ以前のたとえば照国－若葉山(1952年春場所)の報道では3紙とも写真はなく、誤審の可能性にも触れていない。ごく普通の記事である。紙上に掲載されなかっただけで、読売が写真を撮影していた可能性はあるが、わざわざ自社が報道していないものまで例に挙げるような記事の書き方はやや扇情的であろう。
- 7 この座談会は千秋楽翌日から3日連続で朝刊に掲載されている。引用したのは1日目の記事になる。
- 8 読売の記事中に列挙されていた1955年以前の取組はいずれもビデオ判定前史の起源以前ということである。後で述べるようにこの以前以後の境界には明確な一線が引かれている。
- 9 大相撲中継はマイクロ波回線(中継回線)を通じてネット局へと配信されていたので、東京以外の地域でも似たような状況が生じていた。
- 10 引分や預かりは大相撲における勝負の曖昧さを象徴する決着の付け方であった。これらが廃止されたのは個人優勝制度の導入時(1925年)である。この以前、団体優勝制度ができた頃(1909年)から徐々に取組の競技性が向上し、引分や預かり自体が減少傾向に合った(新田 2010)。もともと長い時間をかけて大相撲は競技性を帯びるようになり、戦時中の厳粛化を通してそれが浸透していった(西村 2016)。その意味で戦後の大相撲はすでにスポーツ化した大相撲ではあった。しかし、ここで重要なのは勝ち負けの決定が肉眼を超えた瞬間にまで及ぶようになったことである。
- 11 戦前戦中期には相撲をスポーツならぬ武道という捉え方をする向きも多かったことだろう。
- 12 格闘技と初期のテレビの相性の良さについては、しばしばプロレスが例に出される。アメリカでもプロレスの大衆的な人気生まれ、ゴージャス・ジョージらのスターを生み出し、日本でも力道山を生んだ。
- 13 栃錦の横綱昇進は1954年、若乃花は1958年である。1958年は10%程度だったテレビの世帯普及率は栃錦の引退する1960年に44.7%まで上昇した。